

山を通して学ぶ授業開発のための国際協働 —富士山・レーニア山教育交流プロジェクトの中間報告—

富士山・レーニア山教育交流プロジェクト日本チーム*

キーワード：授業開発，富士山，レーニア山，国際理解教育，教員の国際協働

日本最高峰であるとともにその美しい山容から日本にとって象徴的な存在となっている富士山は、その地質、植生、山麓での湧水などの自然環境のみならず、社会・文化的な面も含む様々な観点から格好の教材となりうる。山麓地域の学校では総合学習として「富士山学習」が行われているほか、学校や自治体が企画した様々な体験学習なども実施されてきた。また、個々の教員レベルにおいても、授業の中で富士山を教材として利用する様々な実践が行われてきた。しかし、このような取り組みを個々の教員や学校・自治体の枠を越えて広げていくには、これらのノウハウや具体的な授業プラン・教材等を集約し、広く発信していく体制が必要であると考えられる。社会人への啓蒙活動としての社会教育も含め、教育分野における富士山の活用は、富士山の世界遺産登録を目指す上でソフト面での重要な課題の一つではないだろうか。

富士山の姉妹山であるアメリカ合衆国ワシントン州のレーニア山（マウントレーニア）では、政府機関である国立公園局が中心となって教育活動にも力を入れている。マウントレーニア国立公園には教育部門の専門職員が配置され、国立公園を訪れた生徒が職員の指導を受けながら自然観察を行うのみならず、教員向けの研修プログラムも頻繁に実施されている。また、レーニア山を題材にした授業プラン集も作成・刊行されている。このような取り組みは、富士山を教材として積極的に活用する際に大いに参考にすべき事例であろう。

マウントレーニア国立公園では、これまでのレーニア山を題材にした教育活動の蓄積をふまえて、姉妹山である富士山も題材として取り入れ、国際理解教育も視野に入れた授業開発に日米両国の教員の国際協働によって取り組むプロジェクトを企画した。この企画は富士学会会長の西川治氏を介して日本側に持ち込まれ、発表者らはこのプロジェクトに日本側メンバーとして参画している。本発表では、このプロジェクトについて紹介したい。

富士山・レーニア山教育交流プロジェクトでは、中学校・高校の生徒らが山を題材にした学習活動を通じて富士山およびレーニア山とその山麓地域への理解と関心を深め、国際交流への動機付けにもつながるような教科横断的な授業開発に取り組む。プロジェクトの枠組み作りのために2008年3月にマウントレーニア国立公園の教育センターで両国の関係者による会合が開催された（伊藤ほか，2008）。その後、内容や期間の再調整を経て、両国の教員が参加する授業開発のための国際ワークショップを2010年夏にマウントレーニア国立公園で、また、2011年夏には富士山麓地域で開催し、両国の教員による意見・情報の交換、人的ネットワークの構築を図ることとなった。第1回の国際ワークショップ（2010年8月，マウントレーニア国立公園）には日本から6名の教員が参加し、国立公園の視察のほか、山を題材にした授業開発のあり方について模擬授業などを通して議論した。文化や社会制度が異なる国の教員との議論および山での体験をふまえて、魅力的な授業を開発していきたい。

* 富士山・レーニア山教育交流プロジェクト日本チーム：佐藤崇徳（沼津高専）・伊藤智章（静岡県立吉原高校）・松本千登世（大阪市立芸芸高校）・小林設郎（静岡県立三島北高校）・中村勝芳（静岡県立春野高校）・中村誠治（河口湖南中学校）・堀内竜幸（富士吉田市立明見中学校）・加々美竜也（富士吉田市立教育研修所）・太田弘（慶應義塾・普通部）・段理紗子（国際基督教大学・学）・青木直子（富士山クラブ）